

入選

井戸を見直そう

私達の身近にある水―日本のように、いつも水道からきれいな水が出る国は、ほとんどないと言っていていいでしょう。毎日、たつぷりのお湯でお風呂に入れるし、水を飲みたくなれば、蛇口をひねっていつでも飲めます。私達にとってこのようなことは、普段の生活でしている当たり前のことです。今まで当たり前すぎて、あまり考えたことはありませんでしたが、改めて考えてみると、とてもありがたいことだと思えます。

私の住んでいる栃木県佐野市は、自然豊かで山に囲まれており、地下水が豊かです。佐野市では、その水を浄水場できれいにし、各家庭に給水しています。凝集剤注入や塩素注入など科学技術の力で、安全な水を使うことができるのだということが分かりました。このように、きれいなおいしい水が飲めるということはとても幸せなことだと思えます。

しかし外国では、日本のようにきれいでたくさんの水を使えるところは、多くはありません。アメリカのラスベガスは砂漠の中にできた都市で、水が不足しています。そのため、水を使い過ぎると、多額の罰金を払わなければならない、という決まりがあるそうです。

また、日本でも災害時には、水が使えないことがあります。三年前の東日本大震災の時に祖父母の住む茨城県が何十日間も断水になりました。停電や余震をおそれながらの生活は、とても大変だったと思います。お風呂に入ること、トイレで水を流すこと、水道水を使って料理をするのと、いつも当たり前のようにしていることができなくなってしまうそうです。いとこは当時赤ちゃんでしたが、何日もお風呂に入っていないかっただめに、しっしんができて、ついには皮膚炎になってしまいました。私はそのことを聞いた時、とてもかわいそうだと思いました。私の家は断水にはならなかったのですが、何とかして来てほしいと頼みました。

しかし、数日後の電話で赤ちゃんのしっしんが治ったことを知りました。その話を聞いた近所の人が家の井戸を貸してくださり、それをわか

栃木県 佐野日本大学中等教育学校 一年 中村華

してお風呂に入ることができました。その井戸は、長い間使っていないかっただけですが、震災の後もう一度手入れをし、断水の期間にたくさんの方の生活を支えました。

私はそれまで、井戸を使っていたのは大昔で、今はどこにもないものだと思っていました。早速井戸について調べてみると、実はつい最近まで日本人の生活になくてはならないものだったと分かりました。井戸は、約九千年前から使われていました。井戸ができたことよって、より水が身近になり、いろいろな場面で活用され、人々の生活を豊かにしていたと思えます。しかし近年、衛生の基準が厳しくなり、井戸は日本の社会からだんだん姿を消してしまいました。水道は、浄水場の機械や、薬を使って水をきれいにするので、いつも安全な水です。しかし、井戸の水は土地や時期に水質が左右され、また管理も大変なため、使用してはいけなと言われることが多くなり、井戸の数が減ったそうです。しかし、井戸は災害時に大いにかつやくしました。井戸の水で救われたという人もたくさんいました。そして、震災をきっかけにして、井戸を見直し、作りたいと思う人が増えてきているそうです。

私達が豊かに暮らしていくためには、浄水場で水をきれいにし、水道の設備を使って各家庭に給水することが不可欠です。しかし、それと同時に昔から日本人が活用してきた井戸を見直し、整備し、再び活用していくことも大切ではないでしょうか。新しい科学技術と古い伝統が一緒になった時、日本は大きな力を得て豊かな水を持つ国になります。私は水をかけがえのない資源として、大切に使用していきたいと思えます。

入選

故郷の水を守るために

清流那珂川が流れる私の故郷では、四季を通して美しい景観を目にすることが出来る。きれいな水と空気に恵まれた里山には、斜面地を利用したたくさんのお米が広がっている。中には、日本のお米一〇〇選に選ばれている美しいお米もある。

私の祖父母もお米を作っている。そのため、我が家では毎年、おいしいお米を食べることが出来る。

私がまだ小学校二年生のとき、夏になり祖母と一緒にお米を見に行ったことがあった。そのとき、私は祖母に素直な疑問を投げかけた。

「どうしてここはいつもお米がたくさんとれるの？」

「ここは水がきれいだからねえ。」

「水がきれいじゃないとダメなの？」

「あたり前だよ。汚かったらなにもできないんだから。きれいな水のおかげでお米がたくさんとれるんだよ。」

そう祖母が教えてくれた。そのとき八歳だった私には、水が万物にとってどんなに貴重なものかわからなかった。だが、「きれいな水が大抵だということ」は祖母の言葉から伝わってきた。

私の学校では、毎年冬に那珂川をきれいにするために河川敷清掃を行っている。昨年は十二月の土曜日に実施された。当日は九時に学校に集合し、保護者や漁業組合の方々と一緒に徒歩で河川敷に向かった。その途中、空き缶やたばこの吸い殻などがたくさん落ちていた。河川敷に到着すると、川沿いに目立ったごみはなかったが、草むらのをのぞいてみると、タイヤや電化製品などがらくたが捨てられていた。その他にも、燃えかすの中に釣り針が埋められている状態が捨てられていた。また、放置された鮭の死骸が異臭を放っていた。川の水が汚れば、自然界の生き物や人間にも少なからず影響がでる。あきらかに故意に捨てたと思えるゴミを目にして、とても残念な気持ちになった。

栃木県 茂木町立中川中学校 三年 廣木 未唯

その一方で、一つだけ嬉しいこともあった。それは、ゴミが多いとは言っても、年々その量が減りつつあることだ。こちらからも、地元の水をみんなの手で守り続けていきたいという気持ちが強くなった。まずは、水を流しっぱなしにしない、家庭の台所から油を流さないなど、誰にでもできることから実践していきたいと思う。

貧しい国には、泥水を飲んで生活している人もいる。水をくむために毎日何キロも歩いている子どももいる。新鮮な野菜もお米も作れない。私たちは、きれいな水を飲んで、おいしいお米を食べることが出来る。これはとても恵まれていることだ。だからこそ、有限である水を私たちが大切にしなければならぬ。

あるとき、ニュースで他の地方のお米の病気や害虫などの被害を受けたことを報道していた。そのとき、私の家は一つ問題が起きていなかった。それどころか、毎年、決まった量かそれ以上のお米を収穫していた。それは、祖母が言う「きれいな水のおかげ」なのだろう。また、水に恵まれたお米やその周辺には様々な植物や生物が生息している。中にはハッチョウトンボのような珍しいトンボの姿も見ることが出来る。これも、「きれいな水」の恩恵の一つだ。

春になると、お米一面に張られた水が輝き出し、田植えが始まる。夏には、緑色の稲が太陽に照らされ、ぐんぐん伸びていく。秋になれば、黄金色の稲が揺れ、収穫へと向かう。やがて冬を迎え、山々と段々畑には雪が静かに降り積もる。私は小さい頃からこの風景を眺めながら育ってきた。この故郷の景観を保つために必要不可欠な豊かな水。その水を守るために、今できることを行っていきたい。